

2017年7月23日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記2章36～46節

説教：そこからどこへも出てはならない

はじめに

イスラエル初代の王であるサウル亡き後、ダビデが二代目の王の座に着きました。しかしいつの時代もそうですが、すんなりといったわけではありません。サウル家は王を輩出した名門の家柄です。当然、次の王も自分たちの一族から出すべきであると考えます。それでしばしばダビデとサウル家の間で争いが起きました。ダビデは努力を重ねてこれをおさめ次第に落ち着いていきます。けれどもちょっとしたことがきっかけとなって、サウル家の不満が噴き出すことがあり、ダビデはそのことでずっと悩みます。

そんなダビデもやがて高齢となり、イスラエル王の地位をソロモンに譲り、墓に葬られます。跡を継いだソロモンは、父ダビデに逆らった人たちを捕まえ、次々と厳しい処置を行っていきます。今日の箇所ではシムイという人が取り上げられ、やはり厳しい処罰が行われています。ここにどのような恵みがあるのかを考えていきます。

1 シムイ

1) ダビデがアブシャロムから追われたとき

まず、シムイとは何者であるのか。そこから見ていきます。時間をさかのぼり、ダビデの息子アブシャロムが父に逆らって王になろうとしたときのことです。ダビデは大急ぎでエルサレムを脱出します。そのとき、サウル家の有力者であったシムイが出て来て、ダビデに向かってこう叫びました。第二サムエル記16章7、8節。「出て行け、出て行け。

血まみれの男。よこしまな者。主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王なったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手に王位を渡した。今、おまえはわざわいに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

王に対する大変な侮辱です。これを聞いていたダビデの部下たちはシムイを殺そうとしたのですが、ダビデはそれを制止し、じっとこらえながら荒野に逃げていきます。

2) ダビデがエルサレムに戻るとき

それから時間が経ち、アブシャロムとの戦いが終わり、ダビデがエルサレムに戻るためにヨルダン川を渡ろうとしていたときでした。シムイが一族千人を連れて来て、ダビデが川を渡る手伝いをします。そしてダビデにこう言うのです。第二サムエル記19章19節。「わが君。どうか私の咎を罰しないでください。王さまが、エルサレムから出て行かれた日に、このしもべが犯した咎を、思い出さないでください。王さま。心に留めないでください。このしもべは、自分の犯した罪を認めましたから、ご覧のとおり、きょう、ヨセフのすべての家に先立って、王さまを迎えに下ってまいりました。」このときもダビデの側近がシムイ殺そうとするのですが、ダビデは「あなたを殺さない」と言って赦しました。

3) ダビデの遺言（第一列王記2章9節）

これでシムイのことはもう終わりかと思

うとそうではない。ダビデはもう自分の死が近いことを悟ったとき、ソロモンにこんな遺言を託します。2章9節。「だが、今は、彼を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人だから、彼にどうすれば彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせるかを知るようにしろ。」

不思議です。確かにシムイはひどいことをしました。でもシムイはあとになってから自分がした罪を認めたではないですか。口だけではない。わざわざ一族を千人も連れて来て、王がヨルダン川を渡る手伝いをした。ダビデもシムイの罪を赦した。それなのに、シムイを処罰するように遺言するのはなぜか。罪を告白しただけでは、赦されないのでしょうか。もしそうであれば、私たちはあとになってから、言われることになります。「あのときは赦したけれど、やっぱりあなたは自分の罪の責任をとらなければならぬ。」もしそういうことであるなら、主イエス・キリストの十字架による罪の赦しはどうなるのか。条件付きなのか。あとになってひっくり返されるのか。大切な疑問です。はっきりさせておかなければなりません。

2 ソロモン

1) エルサレムに家を建てて住みなさい

ソロモンはシムイを呼び出し、36節でこう告げています。「自分のためにエルサレムに家を建てて、そこに住むがよい。」シムイはダビデに対してひどいことをしたわけですから、エルサレムの町から追放されてもおかしくありません。実際、ダビデの側近でありながらダビデを裏切った祭司エブヤタルは追放処分を受けています。ところがシムイは、エルサレムに自分の家を建てて、そのま

ま自由に住んでよいというのです。非常に寛大な処置に見えます。

2) そこからどこへも出てはならない

しかし一つだけ条件がありました。「だが、そこからどこへも出てはならない。出て、キデロン川を渡ったら、あなたは必ず殺されることを覚悟しておきなさい。」キデロン川はエルサレムの城壁のすぐ外側にあります。エルサレムの外に出ることは許されないというのです。厳しいかも知れませんがとにかくシムイは、「よろしゅうございます。しもべは、王さまのおっしゃるとおりにいたします」と言って同意しました。

3) シムイは誓いを破る

ところが三年経ったとき、事態が大きく動きます。シムイのふたりの奴隷がガテに逃げてしまい、シムイはそれを連れ戻すためにエルサレムの外に出てしまった。ガテはエルサレムからおよそ三十キロ離れた所にあります。シムイはろばに鞍をつけたとあるので、間違っただけではない。自分が何をしているか、はっきりと自覚しながらエルサレムの外に出ました。そのことで結局シムイは処刑されてしまったのです。なぜシムイは約束を破ったのでしょうか。そこが不思議です。

3 罪を悲しむ

1) メフィボシエテ

シムイとはいったいどんな人だったのか。そのことを探るために、メフィボシエテという人を取り上げたいと思います。なぜこの人かというと、実はシムイと共通点があるからです。

メフィボシエテはダビデの親友ヨナタン

の子どもで、幼いときの事故が原因で足が不自由になった人でした。ダビデはこのメフィボシエテを引き取って、家族同様の待遇で保護していました。そんな関係ですから、ダビデがアブシャロムに追われてエルサレムから脱出するときも、当然メフィボシエテもいっしょに行くものと期待していた。ところが彼の姿が見えない。後になってから、実はメフィボシエテはダビデを裏切って、これを機会に自分が王となろうとしていると密告する者が現れ、ダビデもその情報をすっかり信用します。

ところがこのメフィボシエテ、ダビデがエルサレムに戻るためにヨルダン川を渡ろうとしていたときに、ひょっこりと姿を現し、こう告げるのです。あのときダビデ王といっしょに逃げるつもりでろばに鞍までつけて準備したのに、あるひとりの家来が邪魔をして、行けないようにした。そればかりではない。その家来は、メフィボシエテがダビデを裏切ろうとしているとの嘘の情報を流して中傷した。そう言ってから、「しかし、王さまは、神の使いのような方です。あなたのお気に召すようにしてください。私の父の家の者はみな、王さまから見れば、死刑に当たる者に過ぎなかったのです。」

さてメフィボシエテの証言は本当なのか。それとも嘘なのか。メフィボシエテには自分の無実を証明する証拠はなにもありません。ダビデはどうしたか。メフィボシエテの姿を見ます。第二サムエル記19章24節にこうあります。「彼は、王が出て言った日から無事に帰ってきた日まで、自分の足の手入れもせず、ひげもそらず、着物も洗っていないかった。」これを見て、ダビデはメフィボシエテが真実を語っていると判断し、メフィボシエ

テの名誉を回復させます。

2) シムイとメフィボシエテの違い

シムイもメフィボシエテも、ダビデが川を渡るときに駆けつけたという点では同じことをしています。でもこのふたりには決定的に違うことが一つだけあります。シムイは自分の罪を自覚していると口では語っていました。でも、ダビデが荒野に逃れたことを悲しみません。イスラエルの王と苦しみを共にすることなど思いもつきません。でもメフィボシエテはそうではない。ダビデといっしょに荒野に逃げることはできなかったけれど、その間、ダビデと苦しみを共にしようとしていました。これがふたりの違いです。

ソロモンはこう言っています。44節。「あなたは自分の心に、あなたが私の父ダビデに対してなしたすべての悪を知っているはずだ。」

確かそうです。シムイは自分がダビデ王に対して何をしたのか、その罪を自覚していたからこそ、ダビデがヨルダン川を渡ろうとしているとき、千人もの一族を連れてやって来ました。けれどもどこか傲慢なのです。千人も連れて来たんだ。王の喜ぶこともしたし、頭を下げれば赦されるはずだと考えています。確かに一時は赦されました。でも本当に悲しんでいません。ですから時間と共に傲慢さが頭をもたげます。ソロモンとの間で交わした誓いをじょじょに軽蔑するようになります。それは目には最初見えません。けれども、いつか表に現れてきます。少しくらい破っても殺されることはないだろう。そんなふうにしてだんだん「たが」が外れ、結局イスラエルの外に出ても何とも思わなくなります。

3) ここに留まるならあなたは殺されない

神は何をご覧になっているのでしょうか。メフィボシェテとシムイのことから教えられます。立派なことをしたとかしなかったとか、表面的な行いを見ているのではない。神がご覧になるのは、むしろ見えない所です。メフィボシェテのように、「私はできなかったのです」と悲しむ者の心をご覧になります。「いや、メフィボシェテだって体も着物も洗わずに汚い格好をするということをした」と言うでしょうか。そうではありません。心で悲しむから何もできなくなった。その結果、あのような姿になった。きちんと順番があるのです。

私たちは今朝聞くことになります。「自分のために家を建てて、そこに住むがよい。だが、そこからどこへも出てはならない。」シムイに語られたことばでした。これを聞いて不自由だと思いますか。でも、考え方を換えれば、ここにいる限りあなたは殺されない。守られるということです。それでも不自由だと思うなら、その不満を神にぶつける前に、自分が神に対してどんなにひどいことをしたのかを思うべきではないでしょうか。神の子であるイエス・キリストを十字架につるして殺すほどのひどいことをしたのです。それなのに神は、エルサレムに住んでよいと言われ、かくまってくれる。そこにいる限りあなたは殺されないと言ってくれる。

その代わりに誰が外に出ましたか。ヘブル書13章12節にこうあります。「イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。」

恵みの中にとどまるようにと、そのために主があらゆることをしてくださったことを覚え、感謝したいと思います。